

山東京伝画 桜下遊女図

学芸員課程蔵
江戸時代後期
縦 171.5cm 横 40.5cm



きりりと高く髷を結び、着物の裾をからげた遊女が、桜花の下に人待ち顔で足を止めている。松のあしらわれた打掛と前帯には抑揚のある墨線を施し、紅白の掛下は色筆で勢いよく表されるが、ほっそりとした首や細面の顔が穏やかな雰囲気を作り出している。打掛は淡い緑と薄墨で立体感が出され、朱と緑の対比や濃淡によって色数の少なさを感じさせない。画面右に桜の幹が太い墨線で表されるが、遊女の頭上に差し掛かる枝にはつながらず、桜花はぽっかりと浮かぶ雲のようだ。桜花と遊女との組み合わせは、江戸吉原の典型的な図様として需要があり、多くの作品が描かれた。

本作のように斜め後ろから見る遊女の姿は、葛飾北斎(1760～1849)も描いている。北斎の絵に京伝が賛をした作品は多く、本作と同じ「吸付煙草」で始まる京伝の賛と、北斎の描く遊女図との組み合わせは、キョッソーネ東洋美術館蔵の扇面「桜花魁図」など三点が確認されている。いずれも享和2年～文化2年(1802～1805)年頃の制作で、人気のほどがうかがえる。

山東京伝(1761～1816)は戯作者として名高いが、もとは浮世絵師で、15歳で北尾重政(1739～1820)に入門すると、政演と号して戯作本の挿絵を描いていた。20代からは山東京伝の名で原作挿絵も手掛ける自作自画の黄表紙を次々に刊行し、人気を博した。遊里を扱う作品も多く、遊女を妻としたことでも知られる。寛政5年(1793)に煙草入れの店を開くと、煙草用具だけでなく、自画賛の扇なども販売していた。「吸付煙草」で始まる賛と、画中の遊女。本作はいかにも山東京伝らしい一幅だといえよう。

(リサーチ・アシスタント 戸矢浩子)

吸付煙草の雲となり／居續日和の雨となる／夜着のうち蒲團の上 一生の歡に會むと／しづまらず／山東京傳題并寫

「吸付煙草」は、遊女がくわえて息で火をつけ、すぐに吸えるようにしたキセル。「居續」(妓楼で遊び続ける)、「夜着」、「蒲團」とともに、遊郭を連想させる言葉である。「一生の歡に會むと」は、『和漢朗詠集』(下・遊女)に「舟の中、波の上で遊女と契りを交わすのも、一生の歡びであることに変わりはない(舟中浪上 一生之歡會是同)」とあるのを典拠とする。「しづまらず」は、寝静まることがない、また衰えないことを指すのであろう。なお幕末の考証家 石塚豊芥子の著『戯作者撰集』には、式亭三馬所蔵の貼交屏風にあった京伝の詠としてこの賛を載せるが、その末尾は「一生の歡會 代金三分(遊女とあそぶための費用)」とあり、本品との異同が窺える。ただいずれにせよ、吉原の遊女を二度も妻に迎えた京伝の生き様を伝えるにふさわしい作品であるといえるだろう。

(客員研究員 中嶋 諒)

文正草子絵巻

哲学科蔵(行徳家旧蔵本)
江戸時代(17世紀後半～末頃)
縦 34.4cm 全長 1332.2cm



下巻 第一段絵部分

の『ふんしやう』絵巻(紙本着色三巻本・江戸時代前期)や茨城県立歴史館蔵「文正草子屏風」(六曲一双・江戸時代)などが近い作例として指摘される。

中でも圧巻なのは、二位中将が身分を隠し巧みな口上や美しい管絃で文正一家と親しくなり、ついには姉娘と契りを結ぶ一連の場面である。突然の風により巻き上がる御簾のしなやかな表現、姫君たちの華やかな衣装、唐絵とやまと絵を描き分けた調度品の見事さなど、細部にわたる描写がここの「恋の場面」を一層盛り上げる。御簾がまくれて美女の姿を垣間見るといった展開は、『源氏物語』(「若菜上」)や『浄瑠璃物語』とも共通するドラマティックな演出である。「文正草子」が嫁入り道具にふさわしい主題でもあることから、こういった「恋」の場面がとりわけ生き生きと描かれるのであろう。

(人文科学研究科美術史学専攻非常勤講師・國學院大學教授 藤澤 紫)

銀製雛道具

山階鳥類研究所蔵 学習院大学史料館保管
江戸時代後期～明治時代



(最小、白粉箱) 縦 0.8cm 横 0.9cm 高 0.8cm
(最大、衣桁) 幅 4.7cm 奥行 1.9cm 高 5.1cm

遊びや風習を通し少女たちが自然に恋や結婚について意識するための装置として、時代を超えて受け継がれていく。調度類は多くは漆工であるが、なかには金銀玉を使用したものも制作され、その極めて小さいながらも贅を凝らした造りには、度々禁令が出されるほどであった。なかでも銀製雛道具は、近衛家、鍋島家、三井家など明治期に華族となった家や、和菓子の老舗虎屋など、極限られた家にも現存が確認されている。制作時期はいずれも江戸後期から明治期にかけてとされるが、この精緻な銀細工の制作や販売を誰がどこで行ったのかは、未だ謎とされている。

展示の銀製雛道具は、旧皇族の山階芳麿侯爵とその妻寿賀子の邸に旧蔵されていたものの一部。寿賀子は、明治37年(1904)伯爵酒井忠道の二女として生まれ、女子学習院卒業後の大正14年(1925)に芳麿に嫁いだ人物である。

(学芸員 吉廣さやか)

